

文末を構成する「のか」の表現性

山村 仁朗

一 先行研究と本稿の課題

文末を「のか」という形式が構成する文は文の種類としては疑問文に属する。

(1) 雨が降っているのか？

しかし、必ずしも疑問というわけではない。例えば、外で音がするので窓を開けたという状況での

(2) 雨が降っているのか！

は誰かに何かを尋ねているのではない。外で音がしていたことの原因が判明して納得していることを表している。あるいは、全く予想していなかった雨が降っているということに驚いていることを表している。納得や驚きを表わしているということになると文の種類としては感嘆文ということになる。

このように「のか」が文末を構成する文は必ずしも疑問

文になるわけではない。納得や驚きなど、疑問文とは異なるニュアンスをもつことがある。

その「のか」という形式について、先行研究では文末を構成する「か」との差異を明確にすることに力点が置かれてきた。その結果、両者の違いについての記述は相当に精度の高いものとなっている。

久野（一九七三）は「のか」について、「話し手が見たこと聞いたことに対する聞き手の説明を求めるのに用いられる」とする。「病気なのですか」であれば、それが単に病気であるか否かを問うているのではなく、例えば話し手が見た「聞き手の顔色が悪さ」が病気によるものであるか否かの説明を聞き手に求める文であり、そのような意味の文を表す時、「のか」を用いるとする。つまり、「のか」の文の意味は前提となる文脈や状況と深く関わることを指摘

する。

また同じく、久野（一九八三）は「の（か）」に述語の「動詞、形容詞、「Xダ／デス」」以外を疑問の焦点とする働きがあると指摘する。

野田（一九九五）は疑問文を「肯否質問文」と「疑問語質問文」に分けて久野の説を検証し、「の（か）」の使用は質問の内容に左右されるとする。また、「の（か）」の「か」の使用は名詞文での「か」の使用に準じるとする。

金水（二〇一二年）では「の」は疑問文の焦点のスコープを明示する働きがあるとの指摘がある（「焦点卓立構文」）。

古座（一九八九）は「〈か〉の文」と「〈の〉の文」の使い分けは、話し手の出来事に対する知識の量にかかわる。「〈か〉の形の文」が「話し手が自分の知らないことをたずねる」のに対して、「〈の〉の形の文」は「うすうす知っていることやよく知っていることについての問いかけ」を表すとする。また、「〈か〉の文」は感情的にニュートラルであるのに対して、「〈の〉の文」は疑いや非難のニュアンスを帯びることがあるとする。

吉田（一九九四）はノデスカ型疑問文は〈準体助詞「の」十述語化要素〉という組成を持ち、具体的表現に用いると〈叙述の体言化とその再述語化〉という機能を持つ。その「の」による叙述の体言化が「問手の回答内容を話手の側であらかじめ予測したもの」という価値をもち、「その

架空の「回答」が実際に相手の回答たり得るか否かを尋ねる」のがノデスカ型〈判定要求〉疑問文である。

また、「不定語という空欄を含む叙述を「の」」によってパッケージングすることによって、そのパッケージにおける空欄の欠如感を際立たせ、もつてその空欄の充足要求のサインとする「構造をもつのがノデスカ型〈説明要求〉疑問文であるとする。「パッケージング」とは体言化のことである。

以上の先行研究では「の（か）」に限って言えば、疑問文としての用法を中心に研究がなされてきた。今後の「の（か）」の研究では疑問文以外の用法にも目を向けていく必要がある。

疑問文の表現性の拡がりについて扱ったものに山口（一九九〇）がある。山口は広義の疑問表現には疑問表現のほか、詠嘆の表現、確認・反語の表現があるとし、いずれの場合も情意性に富むと述べる。そして、その情意の細かいありようについて相互の関連性を見出し位置づけることは疑問表現の全体像を見えやすくするものであるとし、疑問文形式における表現性を記述する。山口は疑問文形式全般を対象とし、古代から近代までを通史的に扱う。

その山口の論からすると、本稿は非常に細やかなものとなる。本稿は「の（か）」という形式について、疑問文の用法とそれ以外の用法がどのような関係にあるかを現代語を用いて考察する。冒頭の例文に即して言えば、（１）と（２）

とを統一した観点から関係づけることの試みである。

二 「のか」の文法性

「雨が降っているのだ」の「のだ」という形式について、話し手がことがらに対する信憑 (doxa) の態度を強く表す形式であると以前、述べた (山村 (二〇〇六))。

「信憑 (doxa)」とはことがらに対する話し手の態度のことである⁽¹⁾。二つの文を使って説明する。

(3) 雨が降っている。

という文は「雨が降る」ということが今、現実を起こっていることを言い表している。

それに対して、

(4) 雨が降っているのだ。

という文も「雨が降る」ということが今、現実を起こっていることを言い表しており、その点では (3) と同じである。しかし、(4) はそれだけではない。「雨が降っている」ということが絶対起こっている、起こっていることは間違いないということがらに対する話し手の確信の態度が認められるのである。その確信の態度が信憑に基づいているのである。

もとより、信憑はあらゆる文に認められる。「のだ」の文ではその信憑を強く表しているということである。

このように「のだ」の文法性を捉えるならば、「のか」

については次のように考えることができる。

(5) 雨が降っているか？

(6) 雨が降っているのか？

何を問うているかという観点から言えば、(5) は雨が降るということが現実において起こっているか否かということである。また、話し手は雨が降っているということに対して何らかの見解を持っているわけではない。その意味で、話し手はことがらに対して中立である。

(6) の場合も何を問うているかという点から言えば、(5) と同様である。一方で、ことがらに対する話し手の態度について、(6) は (5) と異なる。(6) では、ひよっとして雨が降っているのだろうか実降っていないのかと怪しんだり、本当に降っているのだろうか実は降っていないのかと訝しんだり、といったことがらに対する話し手の態度が強く感じられる。それが「か」と比較した際の「のか」の文法性格である。

「のか」は疑問文における話し手の信憑 (doxa) を強く表す形式であり、「のだ」の疑問文形式なのである。

三 「のか」の表現性

「のか」の表現性はどのような拡がりを見せるか。そのことを実例に基づいて整理する。

疑問文とは命題に対して真とも偽とも判断しない、判断

留保の文である。真とも偽とも判断せず、その判断（承認）を聞き手に求める。それが問うということである。但し、判断（承認）をしないとしても、ことがらが真ではないか、偽ではないかという態度をとることはできる。疑問文におけることがらへの話し手の態度とはまず、ことがらの成立に関することであろう。その点から「のか」の表現性を肯定的態度と否定的態度とに二分する。

三—— 肯定的態度に関わる表現性

A 成立理由不明

A 1 不思議・不安

(7) 僕は週末になると象舎に立ち寄ってそのような作業を注意深く観察していたのだが、どういう原理に基いて二人のコミュニケーションが成立しているのかはよく理解できなかった。（中略）僕は一度その飼育係の老人に「どのようにして象に命令するのか？」と質問してみたことがあった。

（村上春樹「象の消滅」）

象を意のままに操る飼育係の老人に対して、象への命令の仕方を問いかけている。ここでは「どのようにして」という疑問語と相まって、老人と象との間でコミュニケーションが取れていることへの興味、老人がどのようにに命令しているのかということをお不思議に思う僕の態度が読み取れる。

(8) 二人になりたい 一つになりたい

心細さを見せずに生きるときも

かもめになりたい 空気になりたい

あなたを傷つけないものになりたい

諦められたらどんなに楽かわからない

激情に身を焦がして 激情に流されて

どこへさまよいゆくのかは知らない

（中島みゆき「激情」）

失恋したけれど相手のことを諦めることのできない女性が自身の行く末がどうなるかわからない、しかしどうなっても構わない、それほど相手のことを思っていることわつたっている。当該箇所には自身の行く末に不安を感じ、心配する女性の気持ちがある。

A 2 あきれ

(9) もしもし亀よ亀さんよ

世界のうちでお前ほど歩みののろいものはない

どうしてそんなにのろいのか

（文部省唱歌「うさぎとかめ」）

自分の軽快な足どりを自認している兎が亀に歩みがのろいことの理由を問うた文である。その亀の歩みののろさに対するあきれや蔑みの態度がある。但し生態に関することを問われても亀はその答えを知るはずはなく、そのことを

承知のうえで兎は亀に問いかける。その点でこの文は形式的には疑問文であるが実質的には疑問文でない。つまり、実質的にこの文は亀の歩みのろさに対するあきれの感嘆文である。「どうして」はここで、あきれ・憐れみの情を表す感動詞である。その「あきれ」という表現性は疑問文として読み取れたニュアンスが文の表面に現れたものである。

(10) それ以来、僕はときどきそこを訪れて、象舎の中に入っているときの象を眺めることを習慣とするようになった。どうしてわざわざそんな面倒なことをしたのかと訊かれても、僕にはうまく答えられない。

(村上春樹「象の消滅」)
裏山から象舎の中の象を眺めるといふ面倒なことを習慣にするようになった理由の問いかけである。この文にはわざわざ面倒なことをすることに對してのあきれ・不思議の気持ちを読み取れる。

A3 推測

(11) 手には鋭いナイフを持っていて、その切先きが宙に弧を描いた。友彦とは青ざめ、目をそむけ、震え声で言った。

「早くそれをしまってください。そんなものは、これ以上、見ていたくない。おとなしくするから、

それだけは引つこめてくれ」
「そうしてもいい。だが、そのかわりしばらくせよ」
侵入者はポケットからひもを出し、手足をしばつた。なれているのか、それは手ぎわよく、完全だった。
(星新一「現代の人生」)
この文は問いかけではない。侵入者がポケットから紐を出して縛る手際のよさに対する話し手友彦の思いであり、推測である。それが事実であるか否かということは問題ではない。

(12) そう、僕はそれが目の錯覚かもしれないと思つて、そのとき何度も目を閉じたり頭を振つたりしてみたのだけれど、それでもどれだけ見なおしてみても象の大きさは変化しなかったのだ。たしかに象は縮んでいるように見えた。僕は最初のうち町が新しい小型の象を入れたのかと思つたほどだった。でもそんな話は耳にしたこともないし、——僕が象についてのニュースを見逃すはずもないし——となると、これまでいた老象が何らかの理由で急に縮んでしまったという以外に考えようがないのだ。

(村上春樹「象の消滅」)
この文も問いかけではない。象舎の中をのぞきこむとい

つもと大きさの異なる象がいる。「町が新しい小型の象を入れた」とは小型の象がいたことに対する僕の推測であり、それが事実であるか否かは問題ではない。

A 4 驚嘆

(13) そういえば、バーのカウンターなんかでは、一杯の水が「チェイサー」などと、とんでもなくオシャレな呼び方になっていたりする。最初、そういう名前のお酒があるのだろう、と思っていたのだが、

「あのね、チェイサーって水のことだよ」

一緒にいた男性に言われ、水には「おひや」以外のよそいきの名前があつたのか！と驚いたものだった。

(益田ミリ) 『言えないコトバ』
この文も問いかけではない。水に「おひや」以外のよそいきの名前があることを了解したことの表現である。それとともに、了解した内容に驚嘆する態度がある。

(14) (原稿料のことを「プレゼンフィー」ということを知った。)

「益田さん、プレゼンティーのことなんですけど、もう少しお待ちいただけますか？」(中略)「それ、どういう意味ですか？」(中略)「そうかあ、今は「ギヤラ」だけでなく「プレゼン

フィー」っていうのも登場していたのかあ。時代についていけないことで、お仕事先の人をハラハラさせてしまつて申し訳なかったのである。

(益田ミリ) 『言えないコトバ』
話し手が「プレゼンフィー」が原稿料を意味する語であることを知ったことに対する驚嘆である。知らなかったなあというニュアンスもある。

以上、肯定的態度に基づく表現としてA1からA4を取り出した。これらの表現の特徴として、「どうして」「どのように」など疑問語が共起する傾向にある。それはこれらの文に「ことがらの存在は認めるがその成立理由が不明である」という話し手の態度が共通して見られるからである。肯定的態度の表現と呼んできたAを「成立理由不明」系と呼び改めることにする。「成立理由不明」ということを端的に表すのがA1(不思議)である。それが次のように展開する。

A 2 (あきれ) 「存在を認め、理由を不問に付す」

A 3 (推測) 「存在を認め、理由を推測する」

A 4 (驚嘆) 「無条件に存在を受け容れる」

三―二 否定的態度に関わる表現性

B 成立疑念

B 1 懐疑

(15) (由紀子は宿泊先で出会った老婆から会いたい人を呼び寄せることができるピンを買い取った。

その後、そのピンについて友人と会話する。)

由紀子はあたりを見まわしていたが、窓のほうに目をとめ、思いついたように言った。

「やってみましようよ。このピンの魔力がほんとうなのかどうかを…」 (星新一「金色のピン」)

おばあさんから買い取ったピンに魔力があるか否かを問うている。そのことともに、ピンに魔力があるということをおばあかに信じがたく思う由紀子の懐疑の態度がある。懐疑的であることため、ことがらの成立に対して否定的な面があることは確かである。

(16) 日本に敗れ、急降下した、赤い悪魔の の評価。

ベルギー代表は本当に強いのか？

「フットボールチャンネル」記事の見出し

<http://www.footballchannel.jp/2013/12/28/post18913>

サッカー日本代表に敗戦したことにより評価が急落したベルギー代表の強さについての問題提起である。それとともに、「ベルギー代表が強い」ということに対して記者は

懐疑的である。

(17) (詰め将棋の解説)

こんな堅く守られている玉が詰むのか？ と疑問に思うかもしれませんね。じつはピッタリの

1手があります。正解は3四桂。同歩は角の利

きがとおるので玉を取ることができません。1筋は香が利いていて逃げられません。詰みですね。

1四桂と打つと、香のジャマをする格好になり、1三玉と逃げられます。

(上地隆蔵『羽生善治のこども詰将棋入門』)

問題として与えられた局面に対して、この局面で玉が詰むということは難しいだろうと訝る読者の気持ちを代弁している。仮定ではあるが、詰まないのではないかという玉を詰むことに懐疑的な読者の気持ちが認められる。

B 2 詰問

(18) もう一人私都在这里思い出すのは、一九八五年、

日航ジャンボ機の墜落事故で、九歳の息子さんを亡くされたお母さんの姿です。(中略)なぜあの時一緒にいてやれなかったのか。九年の人生

で一番怖い思いをしただろう時に、どうしてそばにいてやれなかったのか。お母さんの文章は、

始終自分を責める言葉で埋まっていました。

(小川洋子『物語の役割』)

一例目、二例目ともに形式的には息子と一緒にいてやれなかったのかと自身への理由の問いかけとなっている。但し、ここでの問いの答えは母親にとつて自明のことであり、わざわざ答える必要のない問いである。それを敢えて疑問文の形式で表現するところにこの文は成立している。実質的には自身の行動を厳しく問い詰め、自身の行動を後悔する表現である。「なぜ・どうして」は、ここでは後悔・自責の念を表す感動詞となっている。

(19) 強がりはやせヨと笑つてよ

移り気な性質よと答えたら

それならば唇かみしめて

なぜ目をそらすかと 問いつめて

いつからこんなふうになったのか

子供のようには戻れない

強がりはやせヨと笑われて

淋しいと答えて 泣きたいの

(中島みゆき「強がりはやせヨ」)

自分の気持ちを素直に表すことのできない性格に対して、このような性格になった時期を自身に問いかける。ここにはそのような性格になってしまった自身を憂い、後悔している気持ちが表れている。自身のことを問い詰めること、自身の現状をよく思っていない点で(18)に通じる。

B 4 納得

(20) 「いつたい、なんの検査です。」

「防犯用の非常ベルが、完全かどうかを調べるのです」

「そんなことだったのか。そのベルならそこだ」

(星新一「盗難二品」)

この文は問いかけてはいない。検査の内容が防犯用の非常ベルの調査であることを了解し、納得したことの表現である。

(21) (自身が医師免許を持っていないことが警察に発

覚した。しかし、医師はそれが発覚した理由が

わからないでいる)

「しかし、凶器を持った、追いつめられた犯人と

いつしよです。飛びこんでは危いと思つて、芝

居をしたわけですよ。警察も、それほどばかり

はありません」

「芝居だったのか……」

(星新一「計略と結果」)

警察が芝居をしていただけであり自身が医師免許を持っていないことが露見したわけではないことを知り、安心して納得している。

(22) 「わたしはカメラ会社をやっています。しかし、

現状に安住しては、他社に負けてしまいま
す。新製品の開発に努力し、やっと試作品が完
成しました。水で洗えばきれいに落ちる感光印
画紙、つまりこれです。試験的に紙幣にぬつて、
それに紙幣を複写してみただけです」

「たしかに新製品のようなだな」

「ええ。ですから、さつき盗まれた時は、これが
産業スパイや商売がたきの手に渡つたらと、い
てもたつてもいられない気持ちでしたよ。分析
されて、さきを越されたらおしまいですからね」
「そうだったのか。だが、紙幣に紙幣を複写する
など、人さわがせじやないか」

(星新一「盗難品」)

さきほど順平が紙幣を持って行くことをやめてくれと執
拗に哀願したのが他社の手に渡つて先を越されては困るか
らであったことに対して、了解し、納得することの表現と
なっている。

先に、Aの肯定的態度に基づく表現を成立理由不明系と
呼び改めた。それに対応させて、Bの否定的態度に基づく
表現を名付けると「存在疑念」系と呼ぶことが出来よう。
「存在疑念」とはことごらの存在に疑念を抱いているとい
う話し手の態度である。それを端的に表すのがB1(懷疑)

である。その懷疑が次のように展開する。

B2(詰問)「存在を疑いたいが、渋々認め」

←

B4(納得) ↓「存在を疑わず受け入れる」

B存在疑念系で、A3(推測)に対応するものを今回の
調査では発見することができなかった。

三―三 「のか」の表現性の拡がり

「のか」という形式の表現性を実例に即して取り出した。
A「成立理由不明」系とB「存在疑念」系の二つの大きな
系列に分けたが、A系ではA1では成立理由が不明である
こと、成立理由が不明瞭で容認しがたく、A4に向けて成
立理由の明瞭にしようとし容認していく。B系ではB1で
はことごらの存在に疑念を抱いているが、B4へ向かって
疑念を抱かずに存在を認める方向へと推移する。
そのことを表にまとめると次のとおりである。

	非容認	容認
	←	
	1	2
	3	4
	驚嘆	納得
	推測	詰問
	あきれ	懷疑
	不思議	成立理由不明
	A成立理由不明	B成立疑念

なお、今回採取出来なかつたB3については空欄とする。

四 おわりに

「のか」という形式が文末を構成する文は単に疑問文というだけではなく、さまざまな表現性が確認できる。その「のか」の形式が表す表現性について、統一的な説明を行うことが本稿の課題であった。そのため、「のだ」の形式から「のか」の文法性を考え、「のか」の表現性をA・B二つの系列に分けて整理してきた。その要点をまとめるべく次のようになる。

I 「のか」は疑問文における話し手の信憑 (doxa) を強く表す形式である。

II 「のか」の表現には〈不思議〉〈あきれ〉〈推測〉〈驚嘆〉〈懷疑〉〈詰問〉〈納得〉がある。

II については、表現性の個々をことながら成立への容認度という観点における展開として整理した。そのように整理したわけであるが、これらの表現性は「のか」という形式が信憑を強く表す疑問文形式ということに基づくのであると展望しておく。

個々の用例と見ていく中で、「どのように」などの疑問語や「本当に」などの副詞との共起がよく見られた。どの疑問語とどの表現性とが共起しやすいかということは個々の表現性の繋がりを考えていくための糸口となるように思

う。今後の課題としたい。

注1 文法論において、「信憑 (doxa)」という語を用いる

ものに、川端 (一九七六、一九八二、二〇〇四)、内田 (一九九二) などがある。

また、川端氏は「信憑 (doxa)」を用いる以前、同様のことを「断定・認定 (の気分)」と説明する。

例えば「雨が降りだした」という一文には、雨が降り出したということがらが表現されている、とともに、それに伴って、そのことがらを断定・認定する一種の気分が感じ取られる (川端 (一九六五))

・常識的に言っても、文の統一とその認定とは相関的で、認定・断定とは、簡単に言えば、内容の統一をこそ認定・断定するのではない (同)。

参考文献

- ・内田賢徳 (一九九二) 「助動詞ラシの方法」(吉井巖編『記紀萬葉論叢』塙書房)
- ・川端善明 (一九六五) 「文論の方法」(森岡健二ほか編『口語文法講座1 口語文法の展望』明治書院)
- (一九七六) 「用言」(大野晋・柴田武編『岩波

講座日本語6 文法Ⅰ 岩波書店

(一九八二) 『日本文法提要2 文の基本構造』

(『日本語学』一一一 明治書院)

(二〇〇四) 『文法と意味』(尾上圭介編『朝倉

日本語講座6 文法Ⅱ』朝倉書店)

・金水 敏 (二〇一二a) 『疑問文のスコープと助詞「か

」の』(『国語と国文学』八九—一

二)

(二〇一二b) 『日本語の疑問詞疑問文と「の

の有無』(『語文』九九)

・久野 暉 (一九七三) 『日本文法研究』(大修館書店)

(一九八三) 『新日本文法研究』(大修館書店)

・古座暁子 (一九八九) 『くか、くのか — 会話文におけ

る場合—』(『教育国語』九七 む

ぎ書房)

・阪倉篤義 (一九九三) 『日本語表現の流れ』(岩波書店)

・田野村忠温 (一九九〇) 『現代日本語の文法Ⅰ — 「の

だ」の意味と用法—』(和泉書

院)

・野田春美 (一九九五) 『くノカ?、くノ?、くカ?、く

φ? — 質問文の文末の形—』

(宮島達夫・仁田義雄編『日本語

類義表現の文法(上)』くろしお出版)

・山口堯二 (一九九〇) 『日本語疑問表現通史』(明治書院)

・山村仁朗 (二〇〇六) 『文末を構成する「のだ」の述語

性』(『歴史文化社会論講座紀要』

三)

・吉田茂晃 (一九九四) 『疑問文の諸類型とその実現形式

— ノデスクへマスカ型疑問文の用法をめぐって—』(『島大国文』二

二)

(島根県立大学短期大学部 教授)